
モノクロ・ラーキング

兎葉謳歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロ・ローキング

【Nコード】

N4026T

【作者名】

兔葉謳歌

【あらすじ】

とても小さくて、壮大で、不確かで、でもそこにある、少女の創世の物語

少女とカラス

真っ白なまどろみに、黒い渦が、狂い咲いた。

私は。僕は。俺は。

自分は、気付けば、そこに立っていた。

不安定な場所だった。

何も見えてないようできて、とても雑多なものが、視界を多い尽くしているように感じられた。

何も聞こえないようできて、とても漠然としたものが、鼓膜を絶えず叩いているようにも、感じられた。

しばらくの間、そうしていた。

カタチを、知る。

歪な格好の枯れ木が、点々と、等間隔で続く。

手を伸ばす。

何もつかめない。

息を吸い込む。

苦しくはない。

どうやら、そういうことらしかった。

移動に成功した。

沈んでしまいそうで怖かったが、一步、足を踏み出してみた。

少しふらついたけれど、転ばなかった。

歩けるらしい。

調子に乗って、ぴよんと跳んでみた。

そうしたら、膝まではまってしまった。

どうしよう。

抜けない。

座り込んだら、悲しくなった。

寂しくはなかった。

ただ、悲しくなった。

この場所が、悲しかった。

空と水面を分ける線が無い。

色が無い。

枯れ木しか無い。

だから、何も無いことさえ、ない。

そのことが悲しい。

歩きたい。

涙が溢れてきそうになったので、上を向きたくなった。

だから向いた。

そうしたら、黒胡麻みたいな点があるのに気付いた。

真っ白な空に、ひとつだけ。

その点は、少しずつ、少しずつ大きくなってゆく。

黒胡麻は、黒胡麻ではなかった。鳥だ。

鳥が、堕ちてくる。

そう思ったときにはもう、その鳥は、水面にささっていた。

ささっていた。

目の前に。

水面に。

クチバシが。

あつげにとられて見ていると、その鳥は苦しそうに、ぴよーぴよー
こと体を揺らした。

気の毒なので、抜いてやった。

水面に横たえてやると、ケホケホと咳き込み、呼吸を整える。

するとそいつは、こう言った。

鳥が、喋った。

「やあやあ、どうもありがとう」
驚いた。

何に驚いたって、全くおかしいと思わない自分自身に驚いた。
自然だ。違和感がなさ過ぎる。

という、違和感。

はがゆい。

「どうやら、翼がもげてしまったようだよ」
まいったな、と、鳥が言う。

なるほど。翼がしまわれているべきところに、何も無い。
言葉を返すべきだろうか。

と思ったので、話してみることにした。

けっこうな間、声を出していなかったので、搾り出すのに時間がかかった。

「大変ですね」

なんだか、抑揚の無い声になってしまった。

だが、鳥は気にしていない様子だった。

「そうだよ。どこへ落ちてしまったのか、見当もつかない」
くるり、と、そいつは周りを見渡した。

それに習うように、見渡してみる。

等間隔に並ぶ枯れ木が、あるだけだった。

「あなたは、カラスですか？」

少し気になったので、聞いてみた。

「カラス？」

鳥は首をかしげた。

「ボクは、そう呼ばれたことないな」

おや、と思った。

こんなに全身、真っ黒なのに。

「でも、なかなか良い響きじゃないか。賢そうだ」

鳥はふむふむ、と頷く。

賢そうだろうか。

よく分らない。

「よし、キミはボクをカラスと呼ぶといいよ
鳥は言った。

そんなに簡単に決めることだろうか？

呼びやすいといえは呼びやすいけれど。

「じゃあ、ボクはキミを、なんと呼ぼうか？」
今度は鳥が、そう訊ね返す。

「……………あ、」

答えようとして、声が詰まった。

気付いた。

自分。

己。

誰？

ダレ？

解ら、ない。

呼べない。

咄嗟に確かめようとする。

自分が何者か、確かめようとした。

せめて、容姿だけでも。

「ああ！」

無い。

自分の姿が見えない。いや、見えないんじゃない。

存在していない。

立っていたのに。

歩いたのに。

跳んだのに。

何故。

「どうしたんだい？」

鳥、じゃなくてカラスが、怪訝そうに言った。

「忘れてしまったのかい？ 自分がなんて呼ばれていたか」

「はい。…いえ、それだけじゃなくて」

「それだけじゃない？」

カラスの声色が変わる。

「まてよ。するともしかして…」

カラスは言葉を切った。自分が言おうとしていることが、とても信じられないというような様子だった。

「キミ、自分が何なのか、まるで解ってないのかい？」

何なのか。

まるで。

解ってない。

自分が。

その言葉が不気味なほどしっくりきて、顔かざるを得ない。

「そいつは大変だ！ とんでもないことだ！」

カラスがぴよこん、と、一步後ろに飛びのく。

驚いた、のだろう。

「こんなことがあるなんて…いや、それよりも、やるべきことがあるな」

彼はブツブツと呟くと、少し緊張したような、いやに真剣な目でこちらを見据えた。

「キミは、ボクの知るところの、少女というモノの姿をしている」

「少女…」

思わず復唱する。

「そして少女は、…まあイロイロあるけれど、キミのような少女は多分、自分のことを私と呼ぶ。ワ・タ・シだ」

「ワタシ…」

ワタシ。

私。

「そら、もう大丈夫だ。自分の体を見てごらん」
見る。

すると、白いワンピースを着た、か細い体がそこにあった。

私は、少女だった。

「体、ある」

私は呟いた。

「キミは、ここに来たばかりなんだろう？」

カラスが訊ねる。

「はい」

「やっぱりか…」

カラスは考え込むように、うつむいた。

下を見た。

白い水面。

「まあ、あとはなるようにしかならないか…」

カラスは呟くと、私を見て言った。

「キミ、特にすることもないだろう？ ボクの翼を探すの、手伝って
てくれないかい？」

私は枯れ木が点々と続く、水面を見た。

白い水面と白い空は、彼方で溶け合って、やはり白になっている。

「私、行きたい」

ただ、思ったことを、言った。

「けど、足が抜けなくて…」
そう。

歩きたいのに。

「足が？ 抜けない？」

カラスは目を丸くした。

のは、一瞬のことで。

ゲラゲラと、ケラケラと、笑い出した。

バカにされているのだろうか。

すごく腹が立つ。

「何が可笑しいの!」

叫ぼうと思っただけで、なんだかくしゃくしゃした、情け無い声になった。

「いや、ごめん、ごめん。バカにしたわけじゃないんだ」

カラスは、まだ笑みの残る顔で謝ると、こう言った。

「キミ、足元も見てごらんよ」

「え?」

すかさず目を落とすと、そこには。

ふくらはぎと、裸の足があった。

「どうして…」

たしかに、はまっていたはずなのに。

沈んでいたはずなのに。

「まあ、なんていうのかな」

カラスはひょい、と頭を傾けて、言った。

「自分のことは、自分だけじゃ分からないのさ」

綻びと黒猫

どこまで歩いてても、風景は変わらない。

のそのそと後ろへ向かって動いていく枯れ木だけが、私達の歩いている証だった。

ぼんやりとそれらを眺めていたので、私は無言だった。

だが何となく、あることが気になった。

だから私は、傍らを跳ぶように歩いている彼に、訊くことにした。

「ねえ、カラスさん」

…。

……反応が無い。

「カラスさんってば」

「おっと、何だい？」

カラスは弾けたようにこちらを見た。

「悪いね。まだその名前には慣れてないんだ。ステキな名前なんだけれど」

ピョンピョンと水面を蹴りながら、彼は私に詫びる。

「ううん。仕方がないわ。それより、少し気になることがあって」

「何なりと」

「カラスさんは私が少女だということを教えてくれたけれど、この場所には、他にも少女がいるの？」

「ああ」

カラスは、「そのことかい」と言っつて前を向いた。

私も前を向くことにした。

枯れ木の速度は変わらない。

「とつてもとつても前だけれど、一度だけ会ったことがあってね。キミによく似ていたけれど、色んなところが違っていた」

私はへえ、と思った。

「例えば、どんなところが違っていたの？」

「うーんと…、キミは真っ白な服を着ているけれど、彼女は真っ黒な服を着ていた。キミは真っ黒な髪をしているけれど、彼女は真っ白な髪をしていた。そしてキミは真っ黒な目をしているけれど、彼女は…」

「彼女は？」

先を促すつもりで傍らを見た。

彼がいなくなっていた。

驚いて、立ち止まる。

枯れ木は動くのをやめた。

辺りを見回すと、彼は私の少し後ろで、立ちすくんでいた。

「カラスさん…？」

「彼女の目は、何色だったんだ？」

どこか呆けたような声で、カラスは呟いた。

「思い出せない。彼女に、目はあっただろうか」

その瞬間だった。

私は息を呑んだ。

白が、歪む。

どう表したらいいのか解らない、異様な光景に啞然としていて、耳障りな雑音が迫るように聞こえ始めた。

いけない、と思った。

まるでこの場所が、綻んでいる様な、そんな気がした。

だから私は、咄嗟に言った。

「きつと、忘れてるだけよ。変な事を訊いて、ごめんなさい」

彼はピヨコン、と体を震わした。気を確かに持ち直したのだろう。

「あ、ああ。きつとそうだ。きつと…」

彼は、また歩き出した。

異変は止まった。

何事も無かったかのようだった。

並んで歩く。

私はまた、新しい疑問を持った。カラスの言う少女は、私のように自分のことが分からなくなったりはしなかったのだろうか。もしそうだったのなら、彼女もまた、カラスに助けられたはずだ。でもそのとき、彼は彼女のことを教えられないのではないか。

不思議に思っただけけれど、覚えていないことを無理に思い出させるのは気が引けた。

さつき起こった異変のことも、訊かない方がいいような気がした。だから私は、黙って歩いた。

歩いている内に、一本の枯れ木に目が止まった。

根元の方が、出っ張って見える。

「カラスさん。あれ、何かしら？」

私が指をさす。

するとカラスは、何だか機嫌を損ねたように、目を細めた。

「あいつ…、またやっているのか」

私はその言葉の意味が解らず、首をかしげる。

そんな私を見もせず、カラスは吐き捨てるように言った。

「あんなのは、放つといた方がいいよ。行こう」

ピョン、ピョンと歩き出す。

私はその、ひどく濃い嫌悪の響きに戸惑い、カラスの背中を見た。どうしよう。

とても気になる。

私はカラスと枯れ木を見比べると、決心した。

「カラスさん。私、ちょっと行つて来る」

カラスはピタ、と立ち止まった。

けれど、またすぐに歩き出した。

置いていくぞ、と言いたいのだろう。嫌われてしまったのかもしれない。

チクチクと胸が痛んだが、それを振り切るようにして、私は一本の枯れ木を指して歩いた。

近づくにつれ、出っ張りが何なのか、分かってきた。

猫だ。

真っ黒な猫が、枯れ木に寄り添うようにして、座っていた。

目を閉じて、まどろんでいるような、慈しんでいるような、そんな表情をしている。

私はその光景に、言い知れない虚しさを感じた。

無限に続く白を見ても、列を成す枯れ木を見ても感じなかった虚しさ。

胸の奥が苦しい。

ぐっと耐えて、声を出す。

「もしもし、その猫さん」

すると、猫が目を開けた。

そして、やはり、喋り出した。

「これはこれは、いつかのお嬢さんですかな」

深い、心に響く声だった。

「いいえ。私とあなたは、初めて会うわ」

彼はどうやら、勘違いをしているようだ。

「いつかのお嬢さんという人は、真っ白な髪をしていませんでしたか？」

猫は私をじつと見て、ゆっくりと瞬きをした。

そして「ああ、」と言った。

「その通りだ。これは済まなかった。貴方とあのヒトは、よく似ている」

前脚で、少しちぢれたひげを撫でる。

もう一人の少女は、この猫とも会っていたようだった。

「何をしているんですか？」

私は訊いた。

すると猫は、

「何をしているか……」

と復唱し、悩むようにして目を細めた。

「この行為を上手く表現できる言葉は、この場所には存在しないのだよ。それを言葉にしようとして頑張ったところで、皆、怪しむよ
うな、不快な顔をして何処かへ行ってしまうのだ」

私は思わず、カラスの不機嫌な声を思い出した。なるほどな、と思っ
た。

「白い髪の少女も、そうだったんですか？」

何となく訊くと、猫は

「とんでもない！」

と言つて、目をまん丸にした。

ひげも心なしか、ピンと張っていた。

「あのお嬢さんは、我輩の不完全な言葉で全てを理解してくれた、
唯一のヒトだ。我輩は、あのヒトにどれほど救われたか知れない。

誰にも理解されない、この我輩を、あのヒトは真つ白な手で、この
場所よりも真つ白な手で、撫でてくれたのだ。『あなたが報われる
その時は、もうすぐそこです』と、励ましてくれた」

猫は少し興奮したように、早口で言った。その話に、私は思わず
聞き入った。

私ととても似ていて、それでも違う、少女。

会つてみたい、と思つた。

「……おっと、すまない。我輩としたことが」

少し苦々しげな顔をして、猫がひげを撫でた。

実に紳士的な猫だ。

「それよりも、我輩のしていることだったな」

「はい」

「本来ならば」

猫の目が、鋭くなる。

「もう、誰にも話したくはない。さすがにもう、無駄だと分かる。だが、」

鋭くなった目が、元の丸みを取り戻した。

「貴女は、あのヒトに似ている」

猫はその狭い胸を、わずかに反らした。

話してくれようとしているらしい。

仄かな空気を感じて、私は緊張した。

猫は、言った。

「我輩は、この枯れ木が消えるのを見届けようとしている」

私は、その言葉を胸の中で反芻して尚、復唱せざるを得なかった。

「…消え、る？」

「そうだ」

肯定した猫の顔が、少しだけ煙ったのに気付いた。

またか。

また、分かってくれないのか、と。

でも実のところ、私は彼の言う事が分からなかったわけではなかった。私はカラスとの出会いを思い出していた。

(自分のことは、自分だけじゃ分からないのさ)

猫のやるうとしていることは、カラスのやったことと、とても似ているように思えた。

それは相反することだけれど、たしかに似ている。
ただ。

消える、という言葉。

それがこの場所に与える響きは、何か、大きくてぼんやりとした
違和感を孕んでいた。

猫の言うとおり、この場所に無い何かを、無理矢理に、本当に無
理矢理に、表そうとしているようだった。
多分。

誰も猫を理解できないことの原因は、そこにあるんだ。

私はそう思った。

「何故、そんなことを？」

「それが我輩の、意味だからだ」

何度も言った台詞なのだろう。言葉を選ぶ様子も無い。

「我輩がこの場所に来たときのこと、この木に寄り添い始めたき
っかけも、今となっては分からない。だが、そんなことは、些細な
ことだ。取るに足らないことだ」

猫は言葉を切った。

「意味に、意味を求めてはいけない」
意味。

きっかけ。

どれも、この場所に似つかわしくない言葉。

この場所に抗おうとする言葉。

気付けばそこにある、この場所に。

ひよつとすると…。

この猫自身も、そうなのかもしれない。

猫は、何度もひげを伸ばす仕草をしているが、その縮れは一向に
直らない。

…口を開くのに、時間が掛かった。

「猫さん」

「うん？」

「私は、この場所に来たばかりなんです。ですから私は今、消えることの向こう岸にいます」

そのことは、話す必要があると思った。

だから話した。

「ほう」

そのとき猫が浮かべた表情は、複雑なものだった。

予想通りだったという風にも、驚いている風にも見えた。

おそらく両方だろう。

「だから」

私は続ける。

「猫さんの言う事が、かえって解るような気がするんです」

猫は、パチクリとまばたきした。

そして。

「…そうか」

ため息を一つついて、笑顔を見せた。

死

「おい！」

突然、後ろから声が弾けた。

カラスの声だった。

「その口に訳のわからないことを吹き込むな」
戻ってきてくれた。

そのことはとても嬉しかった。胸の奥がくすぐったいぐらいに。でも、彼の憤りは、何かが間違っていると感じる。

何かを忘れていると感じる。

私はもう、戻れなかった。

「カラスさん、私の話を……」

聞いてほしいの、と言いかけたときだ。

「翼を持つモノ、否、無くしたモノよ」

私の言葉を遮ったのは、猫だった。

「どうやら、時は満ちたようだ」

「何のことを言っている」

カラスがすこむ。

「ボクにはさつぱりだね。あんたの言う事は、いつもそつだ」

だが、猫は冷静だ。知的な猫目を、目蓋の裏に隠す。

そして、言った。

「知らない振りはそれまでだ。貴様はそのお嬢さんに、話さなければならぬ」

どこか高いところから宣言するような、朗々とした声だった。

カラスは言葉を返さない。

返せない、のだろうか。

黒くて大きな瞳に、焦りが見え隠れする。

「カラスさん……」

私は気付いた。

彼は間違っているのでも、忘れていなくてもない。

認めていないのだ。

長い沈黙が、横たわった。

そして、カラスが、どこか悔しそうにクチバシを開いた。

「ボクはまだキミに、この場所についてあまり話をしていないけれど、本来なら、そんな必要は無いんだ」

「え……」

私は絶句する。

「この場所に来たモノは、皆全てを知っていて、それ以上を知ることはない。だけど、キミはそうじゃない。キミは、とくべつだ」

「とくべつ……？」

「そう」

カラスは私の方を見て、頷いた。

「キミはこの場所のことを何も知らない。自分のことすら忘れていた。ボクは、キミがとくべつだと初めから気付いていたんだ」

そして、と、続ける。

「この場所にとくべつなモノが現れたとき、この場所は、変わらなければならぬ。みんなが元々、知っていることの一つだよ」

そのとき、カラスの顔が微かに歪んだ。

忌々しげでも、悲しげでもなく、ただ苦しげに。

「ボクには、解らないよ。全てを知ってるはずなのに、解らない」
カラスの声が、小さくなる。

ひとりごとのように。

「どうして、変わる必要がある？ ずっとこのままでいればいいのに。ボクらはちゃんとここにいるのに。それ以上何が要るっていうんだい？」

その言葉は、なんだか、閉ざされていた。

そうか、カラスは……。

変わりたくないから。

怖いから。

私に、そのことを隠していたんだ。

「それが解るモノは」

猫が言う。

「この場所には在るまいよ。故に、お嬢さんがここに来たのだろう」
猫目に私が映る。

映っている私の顔は、だらしなく困惑していた。

「そんなこと、私、わからない」

「いいや、貴方は知っている。すぐに、思い出す」

猫は微かな、柔らかな笑みと共に言うと、その視線を、上に向け
た。

「し」覽

それは、彼がずっと、ずっと寄り添っていた枯れ木。

「我輩の意味が、ようやく終わろうとしているようだ」

音。

この場所が創り出した、音。

私はおそらくそれを、初めて聞いた。

鋭い衝動。

鈍い拍動。

破壊。

私はその言葉を思い出す。

崩壊。

私はその言葉に辿りつく。

その音は、間違いなく、枯れ木から発せられていた。

目を見張る。

言葉が出ない。

カラスの叫びが、滲むように聞こえた。

「何だ！ 何なんだ、これは！」

枯れ木が、確かに、身震いした。

ずっと、ずっと、虚ろだったその歪な身体は。

今、ひどく、醜いと感じた。

「ああ」

陶醉するような猫の声。

彼は前脚をいっぱいに広げて、枯れ木を抱きしめていた。

「そう、そうか。そういうことだったのか」

黒い頬を流れる、涙。

「我輩は、お前を死なせる為に、ここにいたのだ……」

……。

……。

……、死。

そう、これは。

この音は。

この振動は。

この叫びは。

この醜さは。

死、というモノだった。

ああ、そうだ。思い出した。

気が付いた。

この場所は間違いなく虚ろだけれど、何も無いわけではないのだ。

どうしようもなく、取り返しのつかないほどに、ここに「在る」。

ただ、そこには、決定的に何かが無かった。

その一つが、死だった。

そういうことだったのだ。

ただ、もう一つ。

もう一つだけ、足りないものがあるはずなのだ。

それは、何なのだろう…？

枯れ木が、ひび割れたその身体から、ものすごい勢いで何かを噴射した。

その様子は、苦痛と悶絶の頂点にいるようだった。

私は身体の内側から何かが進み上げてくるのを感じてよろめいたが、枯れ木から目を離すことはしなかった。

噴射された物を見る。

その瞬間、私はある言葉を思い出した。

「彼女に、目はあつただろうか」

歪む白。

綻び。

カラスの言葉だ。

私は確信した。

彼女に、目はあつたのだ。

その湛える色が、この場所に存在し得ない色だったから、カラスはそれを表すことができなかつたのだ。

今、私達の頭上に降り注いでいるこの色。
頭の奥深くまで真っ直ぐに届く。
ここに在る事を喜び、哀しみ、怒っている。
そんな色。

赤。

「あ・か」

私はしっかりと、くつきりと口の形を作って、言った。

自分の声から、鮮烈な、それでもどこか懐かしい、そんな何かが溢れ出た。

「カラスさん、猫さん……」

呼びかける。

そこには誰もいなかった。

それでも、呼びかける。

そこに誰かがいたということを、私は今、繋ぎとめなければなら
ない。

後戻りはできない。

私は、私の意味を見つけた。

降り注ぐ赤い雫を、両手で包む。

胸へ近づけると、自分の中で、何かが激しく踊り狂った。

それはどうしてか、ひどく心地良かった。

「この場所に、始まりを」

もう一人の少女

…私は気付けば、そこに立っていた。

ただ、あのときと違い、今私は、私が私だという事を知っていて、自分がどんな所に立っているのかも知っていた。

見まわす。

自然と、笑みが零れてくる。

懐かしい。

緑と、青。

果てしなく遠くまで、その色は続いている。

水面と空は青く。

点々と続く木々は、緑色に茂っている。

息を吸った。

身体が、歓喜に震えるのが分かる。

苦しくないだけだった以前の呼吸とは違う、澄んだ力が、そこにはあった。

「カラスさん！ 猫さん！」

呼ぶと、

「ここだよ」

と、背後で声が出た。カラスの声だ。

振り向くと、そこには彼と、

…木の残骸の中に倒れる猫の姿があった。

「っ、猫さん！」

「静かに」

駆け寄りうとした私を、カラスが制した。

「何か、言いたそうだ」

見れば、猫は微かに呻いている。毛が所々抜け落ち、真っ赤な水が体中から零れていた。

こなごなの欠片となった木と、同じ所へ向かっているのだと、私は直感した。

「我輩は…」

猫が、残り少ない力をかき集めて、声を絞り出す。

「我輩の意味を、終えられたのか…」

その言葉の中に何が込められているのか。

それが喜びだけでないのは、分かった。

「ふふ、なるほど。案の定、この場所の変革と、我輩の行為は関係していたようだ…」

猫は苦しそくに、首をめぐらせた。

「…、これは、何というのか。我輩は終わりゆくはずなのに、胸の奥で、何か騒いでいる。まるで終わりゆくのを拒んでいるかのよう…」

とつさに、私の唇から言葉がこぼれた。

「この場所が、始まりを迎えようとしているから」

「…ほう、始まり、か」

猫の口の端から、赤い水が、ゆっくりと伝い落ちる。

「この景色が、そうなのか」

「ううん。これは、その準備。猫さんが見つけてくれた『死』で、準備ができたの」

「…その様子では、思い出したようだな」

「ええ」

頷く。

色のある場所。

死のある場所。

そしてもう一つ、大切な、何かがある場所。
私は確かに、そこにいた。

そこから、来たのだ。

「私の意味、見つかりました」

猫が、笑う。

「そうか。それは、良かったな……」

美しい笑顔だった。

この景色に、負けないくらい。

「実に、惜しい」

猫の声はもう、呟きと呼べるほどに弱々しかった。

「この場所の始まりに、我輩は立ち会えない」

「いいえ」

声が出た。

それが誰の声なのか、分からなかった。

分かりすぎていたから。

私の声だ。

なのに、それは。

私の言葉では、なかった。

「あなたの意味はまだ終わっていません。死のつかさ司」

こんな凛とした声は、私には出せない。

私の口は、次々と言葉をつむいでゆく。

「あなたはこれからも、この場所で、万物を死なせ続けなければならぬ」

猫は、もはや呻きともとれるような声で、訊いた。

「貴方は……」

「久しぶりですね」

閉じかけた猫の目が、見開かれる。

何が何だか、分からない。

私ではない誰かが、私を使って猫に話しかけている。

「この場所が死を迎えるそのときまで、あなたは死を、この場所に繋ぎとめるのです」

「死の…司…」

猫は見開いた目を、懸命に、開き続ける。

「貴女は我輩を、そう呼んだな…」

「ええ」

私ではない私が、首を縦に振る。

「そうか…、なるほど」

猫は一瞬、何かを納得するような、満ち足りた表情をして、目を閉じた。

「こんな無様な姿の我輩を、この場所は、見捨てないでいてくれるのか…」

私ではない私は、もう、何も言わない。

真っ赤な水は。

もう、流れ出していない。

「いいだろう。我輩はそれに、報いよう。この場所の死を、見届けさせてみせる」

弱いはずのその声は。

とても力強く聞こえた。

「願わくは、この場所に、輝かしき始まりがもたらされんことを」

最後にそう言い遺して。

猫は、死んだ。

白い竜

もう猫ではなくなってしまうたその身体を、私はカラスと共に、じつと見つめていた。

すると。

「悲しむ必要は無いし、今は、悲しんでいる場合じゃない」

さっきまで私の口から放たれていた声が、後ろから聞こえた。振り返ると、そこには。

「あなたは、もう一人の…」

「初めまして」

少女は、微笑みながらそう言った。

真っ黒な服。

真っ白な髪。

そしてその顔には、やはり。

深い、深い、吸い込まれそうな赤い瞳が並んでいた。

彼女は微笑みを、すぐに消してしまった。

「話は色々あるけれど、あなたたちにも、まだやるべきことが残っています」

その意味を問おうとする間もなく。

「じつ、と。」

空を切り裂くような音が、私達の頭上を通り過ぎていった。

「お出ましのようですね」

少女が言った。

その音はゆっくりりと、輪を描くようにして私達の前方へと回りこんだ。

音を生み出していたのは、ひたすらに巨大で、強大な、白い翼。そしてそれを操るのは、同じく真っ白な、竜だった。

「ごおおお、と、すさまじい音をたてながら、こちらへと軌道を向けている。

「あれは、一体…」

訊こうと思つて、少女の方を見たら、彼女はいなかった。消えていた。

「カラスさん、あのヒトは？」

「へ？」

ずっと話しかけていなかったカラスは、驚いたようにこちらを見ると、

「あ、あれ、いない」

きよろきよろと、探す。

やっぱり、いなくなつてしまつたんだ。

そういえば、現れたのも突然だった。

そういうヒトなのかもしれない、と思つた。

「何だか」

カラスはため息をつく。

「ボクはもう、訳が解らないよ」

私はそれを見て、何故だか胸が暖かくなつた。

頬が緩むのを感じた。

「私もよ」

そう言つて、前を見た。

竜は、まさに着地するところだった。

木々がしなる。

空気が激しくくつねる、その音に圧倒されながら、私は微かに、少女の声を聞いた。

「やるべきことは、すぐに分かります」

特に意味は無いけれど、私は軽く頷いた。

「カラスさん、あの竜のこと、知ってる？」

「え？ あれは、リユウっていつのかい？」
知らないみたいだ。

「あんなに大きいのに、一度も見たことがないなんて、どうなってるんだろう」

カラスは、竜の巨体を見上げながら、呟いた。

ああ、なるほど、と思った。

「カラスさん。あの竜、真っ白よね」

「うん。そうだね」

「だからよ」

「え？」

カラスは、まさか、という顔をする。

私は続ける。

「空が真っ白だったから、見られなかったんだわ」

そして私がそう言うの間もなく。

竜は、もたげていた頭を上げた。

そしてその、大きな口を開いた。

「貴様らか」

やっぱり喋るんだ。

と思つたのは、一瞬だった。

次の瞬間、竜は激昂した。

「よくもやってくれたな！ この下衆め！」

その声は荒々しく木々を揺らし、水面を揺さぶった。

波が起こり、私達はよろめいた。

「何だこれは！ 何故、オレの体が浮き出ているんだ！ くそ！

くそ！ くそ！」

叫ぶ竜の口から、何かがチロチロと漏れている。

私はそれが、炎だと気付いた。

白い、炎。

視界のすみで、カラスがあとずさる。

竜が、唸る。

「誰にも見られず、ただ飛んでいたかったのに」
その言葉に、私ははっとする。
思わず、カラスを見た。

(どうして、変わる必要がある?)

「これじゃあ、オレは、」
竜が、咆える。

「ただここにいるだけじゃあ、済まされないじゃないか!」

(ボクらはちゃんとここにいるのに。それ以上何が要るっていうんだい?)

そうだ。だから、カラスは。

あんなに苦しそうな顔をしていたんだ。

そして今も。

この竜みたいなのはきつと、この場所に、たくさんいるんだ。

見たくないし、見られたくない。

見たいけど、見られたくない。

関係、したくない。

「何とか言えよ!」

尻尾で、水面を叩く。巨大なしぶきが上がった。

私は彼を見る。

真っ直ぐ。

伝えなきゃ。

ここにあるのはもう、分かれ道じゃない。

うつん、最初から、分かれ道なんて無かった。

この場所が、ここに在ってしまったその時から。

「…消してやる」

竜の白い、切れ長の瞳に、凶暴な光が宿った。

「貴様らも、この場所も、消してやる！ オレを見るな！ … オレを、見せるな！」

牙と牙の間から漏れる炎が、強くなる。

その口から、もう言葉は出てこない。

ぐるるるるる。

お腹を掻き回すような、深い、深い、敵意。

隣から、息を呑む音が聞こえた。

「ね、ねえ、これ、危ないんじゃないかな…」

カラスの声は、震えている。

私も怖かった。

でも。

この竜は、きつと、とても弱い。

哀れなほど、弱い。

「大丈夫」

私は、なるたけ、凜とした声を出すように努めた。

あの少女のような声をイメージして。

「あの竜には、何も殺せない」

竜は、首を高く掲げて、その口を天へ向けた。

開いた口の中で、白い炎が渦巻いている。

瞬間、それが小さく、小さく凝縮して、玉のような形になるのが

見えた。

… 来る。

目を射抜くような光が、閃いた。

そう思ったときには、私は爆音に包まれていた。

耳が壊れるのではなく、耳が吹き飛ばされてしまったかのような

感覚だった。

何も聞こえず、何も見えない中で、何もできず、ただ圧倒される。

私は待った。

死ぬのを、ではなく。

この強大な力が、通り過ぎていくのを。

して、その時は、来た。

ぶわっ、という音が聞こえて、私は耳が治っているのに気付いた。そしてぼんやりと、少しずつ、見えてきたその風景は。

先ほどと、何も変わってはいなかった。

竜を見ると、彼は、啞然とした様子で、一度、まばたきをした。

しばし、沈黙が降りた。

すると。

「…そ…」

竜が呟く。

「…そ、くそ、くそ、くそ！ くそ！ くそ！ くそ！ ああああ！」

それは叫びとなり、再び暴力に変わった。

何度も、何度も、何度も。

幾度も、幾度も、幾度も。

尻尾を、顔を、脚を、水面に叩きつけた。

ばしゃーん…。

最後のしぶきが。

遠く、遠く、余韻を残して消える。

「もう！」

叫んだ。

かと思えば。

彼は、顔を、ゆっくりと水面に押し付けて。

「もう…、ほっといてくれよ…」

消えてしまいそうなその一言と共に、静かに、泣きはじめた。

そらへ

…やるべきことは、すぐに分かる。彼女はそう言った。
なるほど、と思った。

「カラスさん」

竜を見ていた彼は、ゆっくりと、私の方を向いた。
その顔は、悲しそうだった。

…頑張ろう。

「いつてくるね」

私がそう言うと、カラスは神妙な面持ちで、こくん、とした。
私は駆け出した。

竜とは、相当な距離があったようだ。その体の大きさを実感する。
伏せられた顔の近くに到着したとき、私は息を整えるのに必死だった。

何とか息が整うと、私は呼びかけることにした。

何と呼べばいいのだろうか。竜さん、というのは変な気がした。

まあ、二人で話すのだから、いいか。

「すみません」

竜の目が、私を捉えた。

…何をしに来た」

彼の声で、水面にたくさんさんの波紋が生まれて、消えた。

「お話が、したいんです」

私は、なるたけ毅然として見えるように、言った。

竜が、みじめに笑う。

「嘘を吐くなよ。オレを笑いに来たんだろうが」

その目には、さっきのような凶暴な光さえ、無かった。

何も無かった。

「だから嫌なんだ。だから、誰にも見られたくないんだ。誰にも見られなければ、笑われないのに」

竜は、うわ言のように呟く。

いつの間にか、私は拳を握っていた。じつとりと、汗が滲む。伝えなきゃ。

伝えなきゃ。

「誰にも見られなかったら！」

私は吐き出すようにして、そう叫んだ。

竜の目が丸くなる。

「誰にも、笑ってもらえないわ」

その目に、再び怒りが浮かんだ。

「…ふざけんじゃねえよ。からかってんのか！ 笑われるのが嫌だつて、オレはそう言ってるんだ！」

「そうじゃない！」

何で。

「何でそんな風に、『笑う』って言葉を使うの！」
違う。

そんなの、違う。

「たしかに、たしかに歪んだ笑顔もあるわ。それはとっても怖いけど、ただそれじゃあ、暖かな笑顔も、拒むことになる」

何だか。

自分でも何を言ってるのか解らない。

少女に、言葉を喋らされていたときと似ている、だけど違う感覚。これは確かに私だ。

でも、私が忘れている私だ。

「それがどうした…」

竜が、ゆっくりと頭を起こす。

見上げる。

その巨体に、あらためて畏怖を覚える。

「傷つかなければ、いいじゃないか！ 暖かな笑顔なんていらない。そんなモノはいらぬ。ただここにいられば、それでいい！」

誰の笑う顔も。

誰の笑う声も。

関係ない。

それなら傷つかない。

でも、それは。

「…それは、いないのと同じよ」

私の呟きに、竜は言葉を詰まらせる。

怒りのあまりか、それとも。

「…何だと？」

彼の声は、震えている。

「いないのと、」

繰り返す。

「いないのと、…同じ、」

ポツ、ポツ、と水の粒が水面を叩いた。

それはとても残酷なこと。

この場所が、存在してしまっていること。

この場所にいるモノが全て、存在してしまっていること。

いつの間にか、ここにいる。

だから。

いなかった頃の自分には、もう、戻れない。

「あ…、ああ…」

ポツ、ポツ、ポツ。

何重にも、何重にも重なって、波紋は広がっていく。

涙が。

色の無い涙が、青の中に吸い込まれ、その一部になっていく。

「いやだ…、いやだよ」

とても幼い、純粹な恐怖。

「そんなの、いやだ」

のどの奥を締め付けられているような声で、竜は呻いた。

涙が一粒一粒落ちていく様を、私はただ、眺めていた。

ふと、微笑みを浮かべている自分に気付いた。

こんなにも、目の前で泣いているヒトがいるのに、何で笑っているんだろう？

…簡単なことだ。

だって。

私は何歩か歩み出て、竜の、眩いほどに白いお腹をさすった。すべすべしていた。

「あなたは今、泣いている」

穏やかな声が、私の底から溢れてくる。

「どうして？」

私は、問いかける。

「怖い、から」

竜が、嗚咽混じりに答える。

「何が怖いのか？」

再び問う。

「ここにいないことが…」

彼は答えて、そして、声を詰まらせた。鋭い牙の並んだ口が、ぽっかりと開いている。彼も、気が付いたのだ。

私はそれを、再び突きつける。

「その恐怖があるなら、あなたは確かに、ここにいないの。小さな沈黙が生まれた。」

そして、竜が呟く。

「オレは、ここにいる」

「そう」

私は、強く、強く肯定した。

「だから、いなくなることもなんかできない。歪んだ笑顔も、暖かな笑顔も、悲しみも、怒りも、感謝も、あなたに向けられるの」

大切な言葉。きつと、伝わった。

もう、竜は叫ばなかった。

穏やかな流れの中に身を浸し、夢を見ているような、そんな呼吸

を彼の体から感じた。

「一つだけ」

空に溶けるような呟きが、はらりと降ってくる。

「教えてくれ。暖かいつて、どういうことか」

それを聞いて私は、どうしてか、泣きそうになった。

何も話せないほどに、涙がこみ上げてきた。

でも、いい。

言葉は全部、伝わったから。

もう、いらぬ。

私は両手をいっぱい広げて、彼に抱きついた。

涙に濡れた顔をうずめた。

暖かい。

みんながそれを持ってるのは。独りじゃ、気付かない。

こうして、初めて気付く。

自分のことなのに。

自分だけじゃ、分からない。

だけどそれが。

ここにいるということ。

「ありがとう」

「ありがとう」

どっちからその言葉を言ったのか。そんなことはすぐに忘れてしまったし、どうでもいいことだった。

白い翼がゆっくりと、抱き返すように、私を包みこんだ。

竜の頭が、私の耳元までやってきた。

「名前が、欲しくなったよ」

私は、彼の腹から顔を起こして、彼の目を見た。

「名前？ 何の？」

私が聞くと、彼は微笑むように口元を緩めて、

「暖かさを求めて、冷たさを恐れること。あんたが教えてくれたことだ」

「ここに、いること」

「そう」

竜は首を伸ばし、鼻先で天を指した。

「もつと相応しい名前が、あるはずだ。この先に」

その姿を見て、私は確信した。

死と、もう一つ。

彼は今、そこへ向かおうとしている。

そしてそこに辿り付いた時、この場所は始まるのだ。

「オレは、行かなきゃならない」

強い。

必死にいなくなるうとしていた彼からは、想像がつかないほど、

その声は強かった。

今の彼なら、見つけられる。

きっと。

いや、必ず。

そう、思った。

「一緒に行きましょう」

私がそういうと、竜は嬉しそうに、こちらを見た。

「来てくれるのか？」

「ある少女に、頼まれているの」

「ある、シヨウジヨ？」

「ええ。きっと、すぐに会えるわ」

彼は不思議そうに、少し頭を傾けたが、

「まあ、それならいい」

と笑った。

そして、私を包むようにしていた翼を勢いよくひろげた。空気が激しく飛び散り、波が勇ましく揺れる。

「尻尾をつたって、背中の上につかまってくれ」

彼の言うとおり、私は彼の後ろに回りこみ、何度か転げ落ちそうになりながら背中へと登った。そして、堅牢に伸びている背ビレに、

腕をかけた。

と。

「おおい！」

これは、カラスの声だ。

「カラスさん！」

呼びながら見ると、ピヨッコピヨッコと、カラスが急いでこちらに向かってくるのが見えた。

「そんなところに乗って、どこへいくつもりなんだい？」

「そんなところとは、失礼なヤツだな」

竜が憤慨すると、カラスが鼻を鳴らして言った。

「おや？ さっきまでダダこねてたお坊ちゃんが、言うねえ」

「何だと？ 黒胡麻みたいなナリしやがって」

「くくく。大分マトモになっただじゃないか」

カラスは笑うと、突然、

「いいコだろう。そのコ」

その意味が、一瞬判らなかつた。私は、次第に顔が熱くなるのを感じた。

「どこへ行くのか知らないけどさ。そのコを連れてくなら、ケガさせないように気をつけるよ」

「…分かった」

竜はぶっきらぼうにそう応えた。

私はどうにも切なくなつて、身を乗り出してカラスを見た。

カラスの方もこちらを見て、ゆっくりと首を振った。

「僕には翼が無いからね。もう、一緒には行けないよ」

目尻を悲しそうに下げながら、彼はそう言った。

そつだ。

そもそも、私は彼の翼を探すために、歩き出したのだ。

それが、こんなところまで来てしまった。私は今、空の果てへ向かおうとしている。彼の翼は、見つからないままなのに。

ここで、お別れなのだろうか。

そう思って、うつむいたときだ。

唐突に、竜が言った。

「自分だけじゃ、気付かないことがある」

はっとして、竜の頭がある方を見た。

彼は横目で、私を見ていた。

「あんたはもう、そのことを知っているだろう」

(自分のことは、自分だけじゃ分からないのさ)

「ああ！」

私は思わず叫んだ。そして、首が一回転しそうな勢いで振り向いて、カラスを見た。

目をこらす。

ずっと、何も無かった彼の両脇には。

一対の翼が、しまわれていた。

「カラスさん！」

私は、今まで出したことの無いような大声で、彼の名前を叫んだ。賢そうだと言ってくれた、その名前を。

「カラスさん！ そうよ！ そうだったのよ！ 初めから、翼はそこにあっただわ！ 私の体とおんなじよ！」

カラスは、自分の翼をキョロキョロと確認し、目を丸くしたが、その驚きはすぐに消えたようだった。心から納得したように、息をついた。

「私をもっと、早く気付いていれば……」

「いや、いいんだ」

決して大きくはない、落ち着いた声で彼は言った。

清らかで、空気になじんで、よく聞こえる声だ。

「おかげでいろんなものを見せてもらった。キミと並んで歩くのは、とても楽しかったよ。だから、そんなことを言わないでくれ」

バサ、バサ、と、調子を確かめるように軽く空気を叩く。

「ボクが翼を忘れてしまったのは、きつと決まっていたことなのかもしれないね。そして今、翼を思い出せたことも、きつとそうだ。

おかげで、最後までキミと行ける」

「おそらく」

竜が言った。

「あなたの翼では、限界が来るだろう。目的地までは、辿りつけない」

「それでもいい」

カラスはその、つやつやした黒い瞳を、輝かせて言った。

「ここまで来たからには、行ける所まで行くよ。それでもって、この場所の始まりとやらを、見届けてやるさ」

それを聞き、竜は、

「ふん。大した黒胡麻だぜ」

と、少し楽しそうに言った。

「なら、行くぞ」

ゆっくりと。

ゆっくりと。

それでも確かな力を与えられて、白い翼は動き出した。

軋みを解きほぐすように、何度か上下する。

そして。

ぐん、と。

身体が解き放たれる。

そんな感覚を噛み締める暇も無く、それは何度も、何度も、何度も繰り返され、最後に一際強い浮遊感が身体をくすぐると、翼はぴん、と伸ばされた。

一瞬の落下。

しかしそれは息を呑むような美しい流れのなかで、滑空へと変わった。

翼が、空気を、空を、がっしりと掴んだのを感じた。
背ビレにまわした腕に、力を込める。

視界の下で、木々がものすごい速度で通り過ぎていく。その速度はまだ、除々に速くなっていた。

それらを唾然と眺めていると、黒い何か、視界の隅でパタパタと動いているのに気付く。言うまでも無くそれは、カラスだった。

どう見ても、ついて来るのに必死だった。

「カラスさん！ 大丈夫？」

「ま…まだ…」

しかし、少しずつ、少しずつ、流れゆく景色に巻き込まれ、彼は後退していく。

木々はもう、点のようにしか、見えなくなっていた。

高みへ。

高みへ。

私達は向かう。

しばらくして、ふとカラスの方を見たとき。

その目に、何かを訴えかけるような光が宿った。

…そろそろ、お別れだ。

ここから先は、ボクには行けない。

空が、ボクの翼を許さない。

「そう…」

私は思わず呟いた。

眉が下がるのを感じた。

そんな顔するなよ。

分かってる。私だって、こんな顔したくない。
でも。

笑って。

そうすればきっと、また会える。

…そうね。

私も、そう思う。

そう、そう、いい笑顔だ。

きっと、辿りつくんだよ。

ええ。

彼なら、大丈夫。

「願わくは、この場所に…」

カラスが息も絶え絶えに、言った。

「輝かしき始まりが、もたらされんことを！」

そう言って、彼ははばたきを緩め、落ちていった。

竜が、それを知ってか知らずか、はばたきを強めた。

もう、前に進んでいるのか。

曲がっているのかも、判らない。

永遠に。

紛れも無く永遠に、その青は、続いていた。

水面から見上げるものとは違う、無慈悲な青。

それをひたすらかきわけ、切り裂き、私達は進む。

上へ。上へ。

果て無き、果てへ。

そこにある。

猫が見つけた死を、意味あるものに変える何かが。

そこに…。

オオオオオオオオオオ!

竜が、咆哮する。

限界が、近づいているのか?

いや、違う。

彼の身体が、輝き始めている。

純白がさらに澄みわたり、その輪郭を破っていく。

それは空の隙間に入り込んで、原始の青を潤す。

光はただ、ただ、強く。

強く。

強く…。

私の意識は滲み、

溶解していった…。

始まり

球体のような。

立方体のような。

いや、形なんて、無いのかもしれない。

それは、想いのような。

感情のような。

夢のような、そんなモノなのかもしれない。

「お疲れさまでした」

少女は言った。

赤い目をした少女。

「よくぞ、ここまで辿りつきました」

少女は言った。

白い髪をした少女。

「あの場所は、無事に始まりを迎えました。あなたのおかげです」

少女は言った。

黒い服を着た少女。

私は、まるで長い眠りから覚めたかのように、ゆっくりと目を開けた。そこには何も映らなかった。

でも、少女は確かに、そこにいた。

よくよく感覚を研ぎ澄ませると、聞こえる言葉も、微かな匂いも、身体はどこかから入り込んだものではなかった。何もかもが私の中

にあり、全てが完結しているような、そんな感じだ。

「ここは？」

私は尋ねた。

「あなたは今、どこにもいません」

少女が答えた。

「私たちは、一つの意識のかたまりとなって、今、話しています」

「じゃあ、私はあるとき、死んだの？」

あるとき。

竜が光になって。

私の意識は、途切れてしまった。

「いいえ。あなたは、死とは違う形をとって、あの場所から消えたのです」

白い髪が揺れ、不思議な香りがした。

「あなたには、あの場所に、種を持ち込んでもらいました。それはとても特殊な役目です。ですから、離脱の形式も、特殊でなければなりません」

「それは、どんな形式なんですか？」

「説明はできません」

赤い瞳に、私映る。

「そして、さほど重要なことはありません」

重要でない。

ならば、いい。

そう思った。今は、それよりも気になることがある。

「この場所…、いえ、あの場所を、見ることは、できますか？」

「望むのなら」

少女は頷いた。

「遠く、反射と停滞の壁の向こうを、ご覧なさい」

意味は分からなかったが、難しいことだとは思わなかった。

そしてやっぱり、それはできた。

青、緑。

そして内に流れる赤。

その全ての色が、縦横無尽に流れている。

緩急様々に。

濃淡折々に。

空も、水面も、そこには無かった。

そしてその中心には。

光があった。

それがあの白い竜だと分かるのに、一瞬もいらなかった。

「これが…」

私は呟いた。

「そう、この場所の始まり」

少女は言った。

「あの光は、力。巨大な輪の端から端へと移り続ける、この場所の原動力です」

「生きるための」

私ははつきりと、その言葉に相応しい様、言った。

「みんなが生きるための、力」

「思い出しましたね」

どこか作り物じみた少女の顔が、笑みを浮かべた。

「生きるという言葉。さぞ、はがゆかったことでしょう。あなたが前いた場所では、その言葉は溢れ、溶け込んでいましたから」

「すごい…」

私は息を呑んだ。

この場所の始まりに。

「生きる」という言葉に。

「じきに力は形をとどめ、その余力のままに、全ては生き、そして死にゆくでしょう」

「この場所が死にゆくまで」

「一番大きな輪が、完結するまで」

何もかもを思い出した私の声と、少女の声とが入り混じり、やがて一つになっていく。

最後にこの言葉を。

「最後にこの言葉を」

それは堅く、厚く、その内にあるものを守り続ける。

それは慈悲深く、残酷に、その内にあるものを閉ざす。

そして醜く、美しく、その内で仰ぐものを魅せる。

私はそれを知っている。

せかい。

セカイ。

世界。

それは、ここにある。

せかい

木の匂いがした。

よだれが垂れていて、机が湿っているからだ。

飛び起きると、時計は五時を指すところだった。一時間近くも寝てしまったようだ。

首をめぐらせて窓の外を見ると、すさまじいほどの夕焼けだった。赤が赤を貪って、赤を生み出しているような、そんな光景が展開されていた。

球体のような。

立方体のような。

いや、形なんて、無いのかもしれない。

それは、想いのような。

感情のような。

夢のような、そんなモノなのかもしれない。

私は何を言っているのだろう。

寝ていたのだから、見ていたのは夢に違いない。だけど。

しんとした部屋と、夕焼け。

そんな世界の中で、夢は平然と、現実の隣に並んでいる。と。

窓のさんに、突然、カラスがとまった。

びっくりして、死ぬかと思った。

そいつは賢そうな黒い目を、ひとしきりクリクリさせると、

「カア」

と言って飛んでいった。

……。
何故、私は今、「鳴いて」と表現しなかったのか。
とても、不思議に思った。

椅子をひく。

乾いた音が部屋に響き、それはしばらくの間、そこに留まり続けた。

その残響は、何だかいやに綺麗だった。耳を澄まさずにはいられない、そんな美しさがあった。

音は霧散し、私は歩き出した。

その部屋にはもう、誰もいない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4026t/>

モノクロ・ラーキング

2011年5月20日10時10分発行